▲設樂　悠太（したら・ゆうた）　20歳。男衾中～武蔵越生高～東洋大。現在3年生。箱根は2年連続出場。今年は7区を担当し区間1位。また、区間新記録を樹立。

の冬のロードレース大会で、県北で6番の中に4人男衾中が入ったことがありました。特に大きな大会ではなかったのですが、これなら全国を狙えるのではないかと思いました。個人での全国大会出場を狙っていましたが、何秒か記録が足りずに全国大会へは行けませんでした。そういったことも、ある意味「絶対に駅伝で全国大会へ行くぞ！」という力にもなり、最終的にいけたことがよかったです。

町長　中学時代に、川音先生と出会って、陸上に取り組み、よい成績を残し、それぞれ武蔵越生高校に進学したわけですが、中学時代のよさって何でしょうね。

宇野　何も考えずに、楽しんでやれたということです。

町長　そういう環境であったということですか。

宇野　そうですね。他校の環境は厳しい印象がありましたが、男衾中はみんなでワイワイやれていたという印象が強いですね。その環境が自分たちに合っていたのではないかと思います。

町長　設樂さんたちはどうですか。

設樂啓　自由でした。

設樂悠　本当に自由でしたし、楽しくやれたと思っています。

町長　学校全体の仲間、陸上部に限らずそういう雰囲気だったということですね。

小山　他校と比べて自由でしたし、楽しく走れました。

高校時代および現在～変わり始めた意識～

町長　皆さん同じ高校に進学して、厳しく指導を受けて、競争しながら結果を常に出していかなければならない環境となるわけですが、高校時代、または現在の監督は、皆さんにとってどのような存在だと感じていますか。

宇野　自分にとっては、よい順番で巡り合ったと思います。中学時代は、本当に自由にやらさせていただいていましたが、高校に進学して感じたことは、自分は陸上が素人だったということでした。高校時代は、先生方から基礎から丁寧に教えていただきました。大学に進学してからは、監督やコーチから生活面や栄養面などの指導を受けました。自分では、いっぺんに習得できることではないので、いい順番で巡り合えたと思っています。それがあるから、今の自分があるのだと感じています。

町長　育まれた環境が順序よく組みあがっていったという感じですね。啓太さんいかがですか。

設樂啓　高校時代は上を目指そうという気持ちがありました。高校時代の北村先生の指導があったからこそ、東洋大学での結果が残せることにつながったのではないかと思います。

町長　当時、武蔵越生高の勝利（平成21年度男子第60回全国高等学校駅伝競走大会埼玉県予選）は、埼玉栄高の連勝記録を阻止したわけですよね。埼玉陸上界の一つの神話だと思います。小山さんはいかがですか。

小山　高校時代は、中学時代に自由にやれていた分、生活面で指導を受けました。指導を受けて感じたことは、陸上だけでなく、他の面も自分を律することができなければ、成績にはつながらないというものでした。大学ではいろいろ指導されるというよりも、自分で考え、社会に出てから自分をどうするのかという広い視野で将来を見据えて自立を学んでいるという感じです。

両親や仲間に想うこと～感謝～

町長　皆さんが育まれた発達の過程の中で、仲間や家族に対してどのような想いを持っていますか。

宇野　自分は身体があまり強くないので、故障などで1年の半分くらい走れなかったときもあります。そういうときに一番親身になってくれたのが両親でしたし、仲間や友人も声をかけてくれました。それで気持ちが楽になり、今もこうして楽しく、何も考えずに競技に打ち込めるということは、周りの人たちの力や支えがあったのだと陸上を通して思うことができました。

設樂悠　親にはいろいろ迷惑をかけた部分もあったので「大会でしっかり結果を出して親を喜ばせたいな」と思っています。

設樂啓　高2時代、貧血で走れないときがありましたが、そこで親がしっかり栄養面で支えてくれましたので、自分もしっかり陸上で結果を残していきたいという気持ちがあります。

小山　走ることは、たくさんの人たちに支えられているということで感謝していますし、その感謝の気持ちを表すものが、自分たちにとっては走ることなのだという気持ちを持っています。一方で、競技を続ける中での仲間との出会いも挙げられます。陸上を続けていなければ、おそらく高校も大学も違う道だったわけですし、仲間との出会いにも感謝して、今、自分があるのだと感じています。

町長　人間誰でも困難に直面することがありますが、そういうときに親に当たったりしましたか。

小山　思うように走ることができなかったり、けがのときや、自分でも精神的に不安定になったりしたときなどは、かなり親に迷惑をかけたと思います。

町長　高校時代は、肉体的にも、精神的にも未成熟ですし、かといって結果は残さなければいけないですし、その時代は大変苦労されたのですね。

これから目指すもの

町長　将来目標とする、マラソン選手などはいますか。

宇野　自分は駅伝くらいの距離（20㎞程度）で、これからも勝負していきたいと思っています。

町長　皆さんそれぞれが、目指すものはありますか。

宇野　まずは、もっと力をつけたいと思います。大学卒業後は本田技研に就職するので、その選手争いに入りたいですね。一歩一歩やらないと目標を見失うと思っています。

設樂悠　自分は強い選手になりたいと思います。

設樂啓　日本だけではなく、世界で戦えるようになりたいです。

小山　自分の場合は圧倒的なスピードのような武器よりも、粘るタイプというか、調子のよいときも悪いときも安定した強さを持ったランナーを目指しています。

メッセージ～夢はかなう～

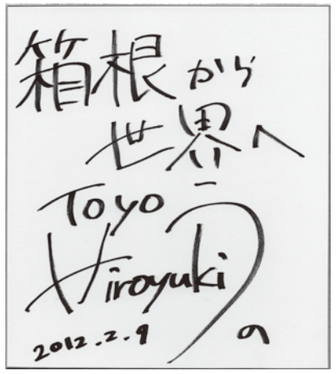
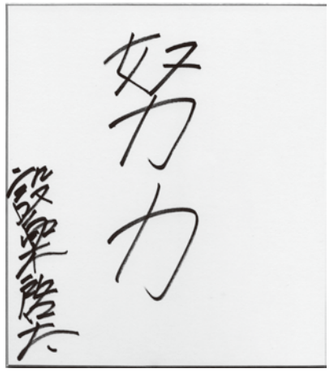
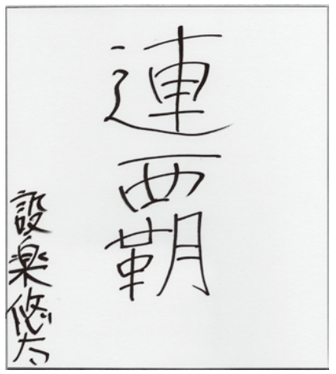
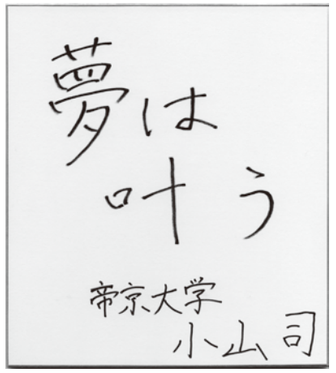
町長　今日、こうして、寄居町出身の皆さんがそれぞれ活躍される中、現状で満足せず、さらに自分の目標を目指してこれからも頑張っていくということを知った町民の皆さんは誇りに感じるだろうし、自分たちも頑張ろうという想いを持つのではないでしょうか。最後に、町民の皆さんへのメッセージをいただきたいのですが。

宇野　一つの目標を目指して、一生懸命努力すれば、思い通りにはいかないまでも、その目標に近づけるということです。これは、自分自身で実感したことでもあります。

設樂悠　皆さんの声援があったからこそ、ここまでこられたのだと思います。これからもよい報告が町民の皆さんにできるように頑張りますので、皆さんも目標を立てて頑張ってほしいと思います。

設樂啓　自分は、高校時代にこつこつ練習し、努力してきたからこそ大学でしっかりでき、箱根駅伝でも優勝できたと感じているので、皆さんも目標を立てて頑張ってほしいと思います。

小山　中学時代の恩師、川音先生の言葉を借りれば、「夢はかなう！」ということです。目標や夢を持って、ひたむきに努力をしていくということは難しいことですが、それを目指す努力をする過程で、必ず結果はついてくると思っていますので、継続することの大切さを伝えたいと思います。自分自身も、これからもっと寄居町をアピールしていきたいですね。

町長　これからも皆さんは、いろいろなプレッシャー等で大変だと思います。私も応援していますので、頑張っていただきたいと思います。町としても、町全体が発展するように情報発信し、一丸となって皆さんが誇れる町にしていこうと思っています。本日は、長時間にわたり、本当にありがとうございました。

一同　ありがとうございました。